

Techno Online

1966年に日本で放映された英国のテレビ番組「サンダーバード」を久しぶりに見た。これは特撮を駆使した人形劇で、飛行機も原子力で動く未来を描く。原子炉がテロリストに襲撃され破壊するストーリーだった。最初は軽微と思われた事故がどんどん深刻になっていく過程は、東京電力福島第1原子力発電所と似ていた。この番組が放映されたころ、同原発1号機の建設準備が進められていたのも興味深い。

東日本大震災と同じ規模の貞観地震が起きたのは千年以上前の869年だった。最近議論されている活断層は過去数十万年以降に動いた断層を対象とする。千年前から今日まで日本は多くの戦争や内戦を経験してきた。これにテロを加えると人的要因のリスクは自然災害より大きい。

戦争や内戦が永遠に起こらないと考えるのは、原発の「絶対安全」や「安全神話」を信じることとほぼ同義だ。新興国ではテロや戦争のリスクは高い。今後、そのような国に原発が建設されると原発破壊と放射能汚染のリスクを世界が負うことになる。

原子力規制委員会が検討する「発電用軽水型原子炉施設に係る新安全基準骨子」ではテロリストが航空機で原子炉

原発脅かすテロ 安全性向上、日本は貢献を

建屋を直撃することに重点が置かれている。しかし、戦争・テロによる地上部隊の破壊活動は、航空機で原子炉建屋を直撃するより容易だ。

筆者は、事故当初から福島第1原発の現状予測と早期収束の提言を行い、ホームページ (<http://www.ifs.toho.ku.ac.jp/maru/atom/index.html>) を公開してきた。その解析でわかったことは、いくつかの幸運と吉田昌郎元所長ら作業員が原発にとどまり、事故を限定的に抑えたことだ。もし作業員がいなければ日本はもっと破滅的な打撃を受けていたかもしれない。

現在の原発は、作業員がいることによって安全を維持できる。しかし、戦争やテロで外部電源が遮断されて作業員が長時間拘束されると、正常な原発でも福島第1原発と同じ状態になる。作業員がいなくても原子炉を安全に休眠状態にするシステムが必要になる。

安倍晋三首相はトルコと原発建設に合意し、原発ビジネスを世界に展開する。日本が世界の原発建設に直接関与してもしなくても、福島第1原発の事故を教訓に、より安全な原発開発と運用に寄与することは日本の責務である。

(東北大学流体力学研究所

教授 円山重直)